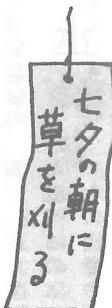


ふるさとの祭りと年中行事 ⑤

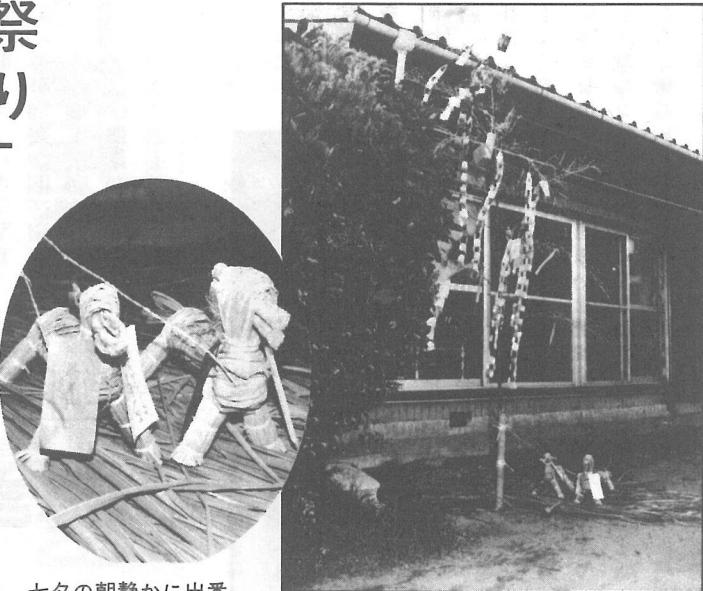
七夕祭りと草馬

かやかや馬



長かった梅雨が明け、蟬しぐれの季節を迎えるころ、かつての村々では「七夕馬」の行事が催されました。もともと、旧暦の7月7日に行われていた民俗行事で、その祭事は、主に子どもたちを中心とするものでした。

前日の夕刻、笹竹に色紙の短冊を飾り、その下に、ムギフラやマコモで作った「草馬」をつなぎました。七夕の朝、未明に草馬を引いて村境に行き、チガヤ・マコモ・ヒ工などを刈り、それを積んで帰るのが一般的でした。

牛馬を労る
「感謝の祭り」

七夕の朝静かに出番を待つかやかや馬

びとは七夕の笹竹に色紙を添えて、書道や裁縫の上達を祈りました。

現在の七夕祭りは、ほとんどが新暦となり、梅雨の最中に行われています。かつては、旧暦の7月1日、「釜の蓋の朔日」に続く、「盆」行事のひとつでもあり、七夕の前に「墓掃除」が行われました。子どもたちの引く草馬も、昔の「迎え馬」の名残りとみられ、やはりお盆の行事だったものと考えられます。

さて、横芝地方の草馬は、俗に「かやかやうま」と呼ばれ、ゆる星祭りの一種とみられ、牽牛・織女両星のロマンスは、古く中国の後漢（西暦二五〇年）の時代にまでさかのぼると伝えられています。7世紀の末には、すでに日本でも七夕の星祭りが行われたという記録があり、宮中の大切な行事としても定着し、人によつては、馬のほか牛も作

られた、やがて餅や麺類を盛った小皿が供えられました。場所によっては、馬のほか牛も作られました。この草馬のならわしは、南関東の各地に認められ、「草

文化財審議委員 伊藤一男

刈馬」「茅々馬」などと称されました。いずれにしても、ふるさとの七夕祭りは、単なる星祭りに留まらず、田畠の耕作に活躍した畜類、とりわけ牛馬に対する「感謝の祭り」でもあつたものと理解されます。